

翻訳資料

## 『決して忘れない』

ハラ・ジーンズ女性労働者の闘いと民主化の三年間

以下は 1973 年から 1975 年のタイでの民主化闘争を記録した映像資料『They Will Never Forget. (決して忘れない)』(英語)の字幕および音声を書き起こし、日本語に翻訳したものである。写真もすべてこの映像からのものである。

(字幕)

このフィルムはタイ人と海外の支援者との共同制作によるものである。このフィルムに関する権利はタイ民衆にある。このフィルムを、タイ民衆に真の民主主義をもたらすために立ちあがり、勇敢な闘いのなかで命を落としたものたちに捧げる。

このフィルムにかかわる収益、観客からの寄付金は、タイの民主化と独立のための運動のために使用するものとする。

(タイトル)

They Will Never Forget.

決して忘れない

—ハラ・ジーンズ女性労働者の闘いと三年間の民主化

共同制作

タイ民衆映像協会 (バンコク)

アジア太平洋資料センター (東京)

支援

タイ民主化連盟

協力

AVACO (キリスト教視聴覚センター：東京)

(ナレーター)

1975 年 10 月 14 日、バンコク市街では民衆蜂起二周年を祝うパレードが行われた。2 年前の同じ日、ラーチャダムヌーン通りを埋め尽くした 20 万人の学生と労働者は新憲法の制定を要求し、逮捕された 13 人の運動指導者の即時釈放を求めた。

首都治安維持部隊は警告もなしに発砲を開始した。デモの先頭にいた数十名の若者が命を落とした。怒りに燃える学生と労働者は政府関係機関のビルを占拠し、国軍と対峙した。デモ参加者たちが解散命令を拒否すると、タノム政権は戦車とヘリの出動を



1975 年 10 月 14 日集会に集まり民主化を祝う人々

命じ、国軍は群集に襲いかかった。それでも人々の決意は固く、また周囲の住民たちもデモ参加者に食料を届けたり、負傷者を手当てしたりして助けた。10月15日、長きにわたって民衆を抑圧してきたタノム政権は終焉を迎えた。タノム、プラパート、ナローンという三人の独裁者の手は、この国に自由を打ちたてようとした少なくとも76人の愛国者たちの血で染まっている。タイの歴史上はじめて、学生運動を先頭とする民衆蜂起によって軍事政権は打倒された。タイの民衆は言論の自由、報道の自由、集会の自由をはじめ手にし、彼らの国は民主主義に向けて歩みはじめた。この民衆蜂起のなかで自らの命を犠牲にした若者たちにタイの民衆は深い敬意の念をいだいていた。だが、タイが民主化に向けた努力が開始されるにつれ、支配階級と軍部は民衆の力の高まりに恐怖を感じ、数百年にわたる自らの独裁的統治の復活を目論んでいたのである。

10・14民衆蜂起はすべての社会階層に大きな影響を与えたが、その影響をもっとも受けたのは抑圧された人々だった。これらの人々は自らの権利と生存条件の改善のために闘いに立ち上がった。1975年11月、タイ北部・東北部の数万の農民たちがタマサート大学に集まって大集会を開催し農地改革を求め、さらにタイ農民連盟を設立した。この組織はその後、農民運動の前衛組織となる。労働者もまた自らの権利のために闘いを開始した。1974年6月、バンコク地域の繊維労働者は一週間にわたる集会を開催し、最低賃金の賃上げを要求した。この闘いは勝利し、労働者の闘いは次の年に向けてさらに高揚していった。なかでもドウシッターニー・ホテルのストライキはもっとも重要な闘いの一つだった。この高まる労働者たちの闘いのなかで、1975年10月、ハラ・ジーンズの二つの工場で働く女性労働者たちはストライキに突入した。

ハラ・ジーンズは台湾資本の会社で、タイでは最大手のジーンズ・メーカーである。タイに3つの工場を持ち、さらに香港、マレーシア、シンガポールでも操業していた。タイにある工場のうち、トローク・チャン工場はバンコク市内にあり、もう一つは郊外のオームヤイにあった。労働者たちは非常に劣悪な労働環境に不満を持っていた。6年にもわたって賃上げは行われず、低賃金のままだった。労働法に定められた様々な基準も守られておらず、また労働者のための厚生施設もほとんどなかった。

#### (女性労働者1)

この工場には200人が働いていてトイレは1つしかありません。ケガをしたときの応急処置の道具もなく、飲み水もありません。残業するときには残業代として水が瓶で一本渡されるだけです。私が残業代を支払って欲しいと言ったら、経営者から「なんでこれで満足できないんだ」と言われました。

#### (女性労働者2)

私の名前はプディワンです。

ー出身はどこですか？

プラーチーンブリー県です。

ー学校は何年生まで行きましたか？

小学校4年生までです。ここで働いて3、4年になります。

ーいま何歳ですか？

15歳です。

ー12歳のときから働いているんですか？

そうです。

ー労働法では15歳未満の児童は働いてはいけないことになっています。監査官が工場に来たときに問題に

はならなかったのですか？

労働省の監査官が来るときには、経営者がみんなをトイレに押し込むのです。

—収入はいくらですか？

働きはじめのころ、月に250パーツもらっていました。その後、1日13パーツに変更されました。

(女性労働者3)

—あなたの仕事はどんなことですか？

私は縫いあがったジーンズのチェックをしています。ジーンズを運ぶのはとても重くて大変です。毎

日朝9時から夕方までずっと立っていて、歩きまわっています。一日中立ちっぱなしなので、仕事が終わると家に歩いて帰ることができないくらい疲れ果てます。経営者は私たちが座るのを禁止しています。座ると怠け者になる、というんです。仕事が終わって座り込むとめまいがします。



インタビューに答えるハラ・ジーンズの労働者

(ナレーター)

この会社の労働者は三つのグループに分けられる。まず月給制の労働者、そして日雇い、さらに重量制の労働者である。重量制では目方に応じて賃金が支払われるために、長く、また集中して働けば働くだけよい賃金がもらえる。

(女性労働者4)

いつも集中して仕事をしてたので、お互いに話す暇なんてなかった。いつも仕事から気をそらすことができなかつたんです。お互いのことを知るようになったのはストライキを始めてからです。ストライキ以前は、重量制で働いてた人はみんな競争していたから。他の人より速く仕事をして、たくさんお金をもらおうと、そのことばかり考えていました。

(女性労働者5)

—仕事をもらうために労働者どうしが争ったりしますか？

もちろん、喧嘩になります。そういうシステムですから。一番たくさんお金をもらいたかったら、はじめに仕事をもらわないといけないんです。私はミシンで指を切ってしまったことがあったんですが、会社の人とは自分でなんとかしろと言うだけでした。「ミシン油でも塗っておけばいい」って。それからもしミシン針が折れてしまったら、自分で新しいのを買わないといけないんです。ミシン針は普通3.5パーツするのですが、普通の店で買ってきた針ではダメだというんです。それで結局、賃金から7パーツ天引きされていました。

(ナレーター)

経営者は仕事をオームヤイ工場のほうに回すようになった。そこでは大多数の労働者が日雇いで働いていた。重量制で働いていたトローク・チャン工場の労働者は、仕事がなくなり困窮した。だが不満を言うと経営者が雇った男に殴られた。一方、オームヤイ工場では5人の労働者が経営者に対して、5パーツの賃上げを含むささやかな要求を5つ提出していた。だがこの5人は解雇された。この解雇をきっかけにしてオームヤイ工場の労働者たちは10月3日ストライキに突入した。そして長きにわたって搾取されてきたトローク・チャン工場の労働者もオームヤイ工場の闘いに加わり、団結を固めた。はじめ経営者は労働者の要求を受け

入ると約束していたが、後になって約束を破り、トローク・チャンの労働者たちのリーダーだったチョイキエンを解雇した。それは火に油をそそぐ行為だった。労働者たちは共同の闘いのもとに団結しており、トローク・チャン労働者たちも加わって彼女たちは工場を占拠した。

(女性労働者6)

工場を占拠してから、一人5パーツずつみんなから集めて食料を買いました。クッキーを作って外で売って、資金を集めたりもしました。みんなでなんとか工場のなかに入ったのはよかったのですが、家族の生活を支えるための収入を作り出すことはできませんでした。食べるものといえば、肉も魚も入らない野菜だけのカレーが続きました。

(女性労働者7)

経営者は私たちと交渉するために弁護士を雇いました。だけど弁護士はこの件を長引かせて、相談料を多くもらおうとしていました。その意味では経営者は弁護士に騙されていたのです。それから経営者はデマを流して私たちを攻撃してきました。例えば私は結婚しているんですが、私が金をもらって社長と寝た、というような噂です。若い女性たちがストライキの間に妊娠してしまった、というようなデマもありました。他にも昇進と昇給をもちかけて私たちを分断しようとするということもありました。それから仏陀の前で「労働組合には加わらない」と誓約させる、ということもありました。経営者が警察に私たちの名簿を渡しているということも明らかになっています。これが証拠です。

(ナレーター)

労働者たちの闘いは困難なものだった。10月22日、経営者はオームヤイ工場の一時閉鎖を発表し、オームヤイの労働者たちに前払い金を支払った。だが後に経営者はあれは退職金だったと主張した。休暇中だったものも含めてほぼすべての労働者が解雇された。だがトローク・チャン工場を占拠していた80人の労働者たちは闘いを続ける決意を固めていた。

(女性労働者8)

私たちは以下のことを要求する。年二回の制服支給、通勤している労働者への昼食の支給、住込み労働者への三食の保障、家族手当、新年に際しての年次ボーナス、最低でも年一回の賃上げ、遅配のない給料の一斉払い、必要な休暇の保障、工場の厚生施設の改善、スト参加労働者を処分しないという確約。

これらはささやかで当然の要求です。



インタビューに答えるハラ・ジーンズの労働者

(ナレーター)

彼女たちは資金を集め、12月には工場の操業を自力で再開することを決めた。工場の新しい名前は「ワーカーズ・ユニティ・ファクトリー（労働者団結工場）」とした。

(女性労働者9)

今日から私たちは自分たち自身で生産を始めます。すでに300人に在庫品を販売し、8,000パーツの資金を蓄えました。原料は小売店から購入しな

ければならないので、同じものを買うにしても経営者が支払っていたより高くなります。それでも以前よりも安く製品を販売する予定です。すべて収益は操業経費と、労働量に応じて支払われる賃金に回されます。

(女性労働者 10)

たとえ前よりも高く買って安く売ったとしても、収益は以前の二倍になるはずですが、なぜなら私たちは誰からも搾取しない、仲間の労働者からも消費者からも搾取しないからです。経営者はこの帽子を 120 パーツで売っていましたが、私たちは 20 パーツで売ります。このジーンズは 285 パーツでしたが、私たちの値段は 85 パーツです。

…音楽…

(ナレーター)

この労働者たちにとってかつて苦痛だった労働は、いまや社会的な喜びとなった。

…音楽…

(ナレーター)

女性たちが「ワーカーズ・ユニティ・ファクトリー」の操業を開始すると、それは瞬く間にバンコク市民の噂となった。学生や労働者たちが工場に駆けつけて応援し、製品を買っていった。女性たち自身も自分たちの闘いを越えて進んでいた。深刻な寒波に見舞われていた東北部に向けて、自分たちの作ったジーンズを無償で送るなどした。

毎週日曜日には、労働者たちは製品をもってタマサート大学に出かけ、市価の半額で売った。一瞬にして製品は売り切れた。

(女性労働者 11)

—闘争に参加したことを家族はどう思っていますか？

みんな怖がっています。私が警察に捕まってしまうかもしれないと心配しています。

—いまでもそうなんですか？

そうです。でも今では反対はしなくなりました。

—以前は闘争に参加するのを禁止されていたのですか？

はい、そうです。活動には近づくなといわれていました。ストライキに参加するために、隠れてこっそりうちを抜け出していました。親に殴られたという仲間もいます。

—今でもそういう状態ですか？

いいえ。いまではそんなことはありません。親たちもだんだん私たちの闘争のことを理解してきていますから。

—工場を占拠して労働者が生産を行うということについて、どう思いますか？

最初は不安でした。全然、収益もあがらなかったし。でもいまではみんな結束しているし、将来は明るいと感じています。

…学生たちの歌…



工場に駆けつけ歌う支援の学生たち

(ナレーター)

学生たちが工場を訪れ、歌で彼女たちを勇気づける。かつての経営者のもとでは、仲間どうして争っていた。個人の収益のためだけに働く仕組みが作られ、労働者は孤立させられ、団結することができなかった。

(女性労働者 12)

いま一生懸命働いています。でもとても幸せです。安定していると感じられます。前よりもみんなと仲良くなったし、仕事で失敗する回数も減りました。

(ナレーター)

人生ではじめて、この女性たちは働くことの喜び、仲間の労働者たちとともに闘争することの喜びを知った。

(女性労働者 13)

工場で空き時間があるときは本を読みます。

ーなんの本ですか？

政治についての本や文書です。

(ナレーター)

労働者たちは工場の一角に図書コーナーを作り、そこでタイの社会や政治に関して勉強して何時間も過ごした。

(女性労働者たちの討論)

ー私たちの要求を政府に提出してはどうかしら？

政府が問題を解決できるとは思えないわ。私たち自身の新しい本物の政府ができれば可能だけど、政府がある人たちのものであるかぎり、いま私たちがやっているように闘いつづけなければならないわ。

ーもしクーデターが起こってもこの闘いをつづけられるかしら？

(ナレーター)

労働者たちは工場を守るために、交代で夜の見張りを立てた。

総選挙が近づくにしたがって、工場の外では政治的緊張が高まっていた。支配階級と右翼勢力は、世論調査で社会党への支持が高まっていることを恐れ、各地で農民運動や大衆運動指導者に対する襲撃を行った。

多くの指導者が暗殺された。2月28日にはタイ社会党の書記長ブンサノン・ブンヨタヤーンが無残

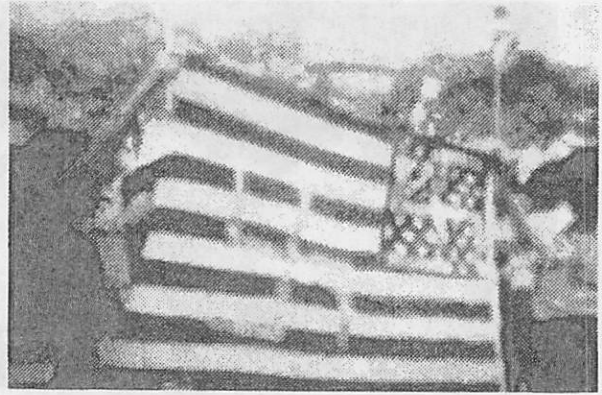


議論するハラ・ジーンズ労働者たち

にも狙撃され、殺された。犯人はいまだ逃走したままである。

3月12日、内務副大臣ブンルートはバンコク治安維持部隊に対して「ワーカーズ・ユニティ・ファクトリー」を襲撃するように命じた。容疑は工場の不法占拠である。労働者たちはククリット首相のいる官邸に行き、不当な命令を即刻取り下げよう求めた。ククリットは彼女たちと会うどころか、32人の労働者と8人の支援の学生を逮捕した。罪状は首相の自由を侵害した罪だった。

逮捕されなかった残りの労働者たちは首相に直接の抗議を続けた。請願書が読み上げられた。



米軍撤退を求める3・20大集会

(請願書)

私たち女性労働者は、すべての人の自由が保障されるように首相に対して申し入れる。雇用主は暴力団を雇って私たちを襲撃し、労働法に違反するあらゆる不法行為を行っている。なぜその不法行為が見逃されるのか？タイは民主主義の国であり、仏教の国であるはずだ。しかし今、タイの貧しい人々にはなんの正義ももたらされていない。

(ナレーター)

ククリットは労働者の請願に応えなかった。事実上、警察による「ワーカーズ・ユニティ・ファクトリー」の襲撃は首相の承認によるものであり、これによって女性たちは強制退去させられた。工場ではかつての経営者が警察に守られながら再び操業を始めた。しかし工場から退去させられても、彼女たちは闘いを放棄しなかった。逮捕され、裁判を待っている仲間の労働者の釈放と職場への復帰を求めた。学生や他の産業の労働者たちからはさらに多くの支持が寄せられた。彼女たちの闘いのニュースはまたたくまに広がり、タイ全土の貧しい労働者や農民たちを勇気づけた。このハラ・ジーンズの労働者の闘いは全国で高揚しつつあった学生、労働者、農民の闘いの一部であり、その闘いは3月20日、タイからの米軍の完全撤収を要求する大規模デモで最高潮に達した。

一方、解放を勝ち取ったタイの近隣諸国では社会主義建設が前進していた。タイ国内で急激に発展した大衆運動と同時に、この社会主義の発展が支配階級と軍部にとっての危機を高めていた。彼らはラジオやテレビで国を売る裏切り者の歌を流すなどして、視聴者を組織しようとしていた。ベトナム難民が共産主義を持ち込んで、国を破壊するといった恐ろしい話を流布させ、民衆に排外主義を植え付けようとした。



タマサート大学を急襲し発砲する国軍兵士

8月15日、支配階級と軍部はクーデターの試みを開始した。まず1973年の学生蜂起によって国を追われ、台湾にいたかつての独裁者プラパートを呼び戻した。彼らは民衆の批判がどれくらい強いかを

慎重にうかがっていたが、結局、世論に強いられてプラパートは再び国外追放となった。

一ヶ月後の9月19日、今度は旧体制の黒幕が呼び戻された。タノム・キティカチョーンが亡命先のシンガポールから帰国したのである。タノムは、自分はただ病気になった父を見舞うために帰国したいだけだと主張した。そしてタイに入るとすぐに仏教僧になるパフォーマンスを行い、政治的な野望がないというふりをした。だが、こんな策略に引っかかるものはいなかった。学生やさらには労働組合の代議員たちは、セニ政権がタノムを逮捕し、民衆に対する警察権力の濫用の罪で処罰すべきだと主張した。

クーデターが目論まれていることにすべての人が気がつき、これに反対する全国的な運動が組織された。労働組合は、もし政府が民衆の要求を聞き入れなければ10月8日にゼネストに突入すると決定した。

…銃声・爆発音…

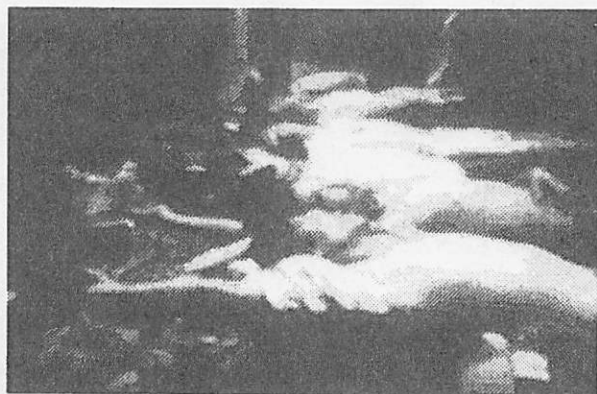
10月6日の朝、支配階級と軍部が動きを開始した。国境警備隊がバンコクに展開させられ、狂信的な戦争にかりだされた。約4,000人の学生が占拠していたタマサート大学に対して弾圧が開始された。その二日前、学生たちはキャンパスで風刺劇を行っていた。そのなかでは労働者が警察によって木に吊るされて殺される様子が描かれていた。右翼勢力は、この労働者の役を演じた学生が国王を象徴する演技をしており、これは王家に対する意図的な侮辱罪にあたりと非難した。

この右翼勢力の主張は王家を崇拜するタイ民衆の特別な感情に触れた。三年前には国家の英雄とされた学生たちに、民衆の批判を向けさせるという右翼勢力の目論見は成功した。こうしたなかで軍部は行動を遂行した。

この仏教国タイの長きにわたる歴史上、最悪の数時間が流れた。300人以上が無残に殺された。なかには右翼に縛りあげられ、殺された上に切り刻まれたものもあった。あるものは、木に吊るされて棒で激しく殴られ、撲殺された。そして他のものとともに焼かれた。

午後7時、国軍はテレビを通してクーデターの成功を宣言した。

集会の自由、報道の自由、言論の自由といったすべての自由が停止された。諸政党と労働組合はおとなしくするよう命じられた。ハラ・ジーンズの闘争はすでに過去のものとなった。3年間の不安定な民主主義の後、タイは再び軍部の支配下に置かれた。豪雨のような暴力と不正が復活した。民衆はこの暴力と不正に声をあげることを禁止された。



殺された学生たちの遺体

では1976年10月以降のタイは、1973年10月以前のタイに戻ってしまったのか？

そうではない。

1973年から1976年までの3年の間に起こったすべての出来事は、タイ民衆の記憶のなかに永遠に生きつづけるだろう。ハラ・ジーンズの労働者たちは、自らの手で工場を操業したあの日々の勝利の感動と喜びを決して忘れることはない。タイ民衆はそ



の闘いに勝利するまで、誰が彼らを搾取し、誰が彼らを苦しめているのか、決して忘れない。そして誰が自分たちを助け、共通の敵に対する闘いと困難を共有してくれたのか、誰が愛する人々を殺し、友人や家族を投獄したのかを忘れない。誰が敵で、そして誰が味方か、彼らは知っている。

彼らは決して忘れない。どんなに過酷な手段をもってしても、どんな残忍な暴力をもってしても、再びたちあがり、自らの運命を自らの手に取り戻す闘いへと彼らを駆り立てる、その記憶を消し去ることはできない。

【河合大輔 訳】